

ただ「存在 (Beingness)」だけが

「すべての人がホームに招かれている」と語るのは、ベルギー在住の覚者、ヤン・ケルスショットさん。ホームとは、故郷であり源、無限で非人格的な本質を指す。ホームはどこにあるのだろうか。

ヤン・ケルスショット

「私」が先に消滅し
ホームが姿を現す

——あなたをホームに帰らせたのは何ですか。

ヤン 自分自身の本性に帰ることは、探究者が信じ、希望している「それ」とはまったく違います。「それ」を指し示す、すべての言葉は役に立ちません。「それ」でないものを示すほうが簡単です。「それ」は、実現すべき何か特別な状態ではありません。過去や現在のすべての感覚を超越したものです。身体の中にある特別なエネルギーの組み合わせでもありません。また、心理的なものでもありません。「それ」は、私が何かを行って起こったものではありません。どちらかと言えば、自然に起こったことです。

——探究のきっかけは何ですか。

ヤン 7歳くらいの時、「私」が存在しなければどんな感じだろうと、自分に聞いたことが何回もありました。そして、15歳くらいの時、女の子とキスをしている最中に大きな超越体

験をしました。私の唇が彼女の唇に溶け始め、一瞬のうちに私は完全に消滅しました。私はもう人として存在していませんでした。この時の経験は時間を超越したものでした。それと、純粋な存在にその姿を現す機会を与えるためには、私が先に消滅する必要があります。それは、本

を読んでいたら、突然真っ白なページが現れたのと似ています。ただ、存在しかりません。そして、この白いページにコメントする立場の人はいません。コメントを言うエゴはいません。

——その後、何が起こりましたか。

ヤン その瞬間から、霊的な探究者になりました。もう一度「それ」を見たくまりました。18歳から25歳の間、私が医学生の時、自然療法、ヒンドゥー教、禅、そしてクリシュナムルティのような哲学者の本を多く読みました。TMもしくは超越瞑想として知られるマントラによる瞑想も行いました。TMの最中、「ただ在る」瞬間が戻ってきました。しかし数年後、マントラを唱えるのをやめ

ました。椅子に座りながら、「ただ在る」状態が起こるのを許すだけで、それが起こったからです。

そして、ダグラス・ハーディングに会った時、彼は「それ」を実際に見る方法を示してくれました。彼の実験は本当に驚きでした。後年、トニー・パーソンズに会いました。彼は、私が探究に対して抱いていた期待を取ってくれました。彼は、「ただ This is It」と言いました。それで探究は終わりました。

視点を換えれば
すでに目覚めている

——非二元とはどういうものですか。

ヤン 単にすべてが在ると言えます。すべての人がです。あなたは「私は存在しない」とは言えません。「在る (Being)」という言葉は魔法のような言葉です。ただ、在る。私は、それを「存在 (Beingness)」と説明します。それは食べた、息を吸ったりというような活動ではないからです。そして、「それ」は習ったり練習したりしなければならぬものでもありません。「それ」は、どっちみちす



© Jan Kersschot



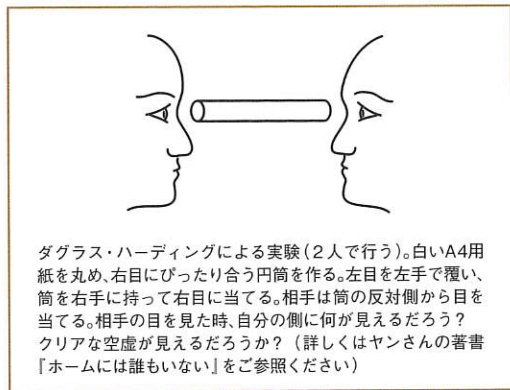
ヤン・ケルスショット

Jan Keresschot
ベルギーのアントワープ大学で医学を学び、1986年より自然医学を実践。スピリチュアリティと哲学に関心を持ち、やがて禅仏教、タントラ、アドヴァイタ・ヴェーダーンタなど東洋の伝統に到達。東洋の叡智の真髄を追求しながら、それを西洋のライフスタイルに調和させることが彼の探究の礎を成している。トニー・パーソンズとの出会いにより、探究は終焉を迎えた。写真家でもあり、個展も開催している。
<http://www.keresschot.com>
<http://www.studioinspiration.be>

になされているからです。『それ』は、観察できる対象物でもありません。『存在』は、時間と空間に制限されません。境界がありません。だからそれを無限と言うのです。だから、私の著書では、『存在 (Beingness)』という単語の頭文字を大文字で書きました。ただ、だからといってそれが神聖なものという意味ではありません。存在という用語を使うのは、それが中立的な表現で、いかなる宗教的、文化的な意味も含まれていないからです。従って、誰も排除しないのです。『存在』には境界がないゆえに、隣近所には誰もいません。それひとつしかない、単体なのです。ただ、非二元的な存在しかありません。

——非二元の教えでは、すでに目覚めていると言われます。しかし、目覚めの体験がない人にとってはこの意味がわかりません。

ヤン これはどの視点で見るとかによります。禅のマスターと弟子の話思い出しました。禅のマスターが川辺に座っており、弟子は川の反対側において、マスターのところに行きたいと思っていました。川はとても深く、また、橋も見当たらないため、彼はマスターに言います。「どうやって反対側に行けるでしょうか?」。マスターは笑いながら、「君はすでに反対側にいるじゃないか」と応えまし



ダグラス・ハーディングによる実験(2人で行う)。白いA4用紙を丸め、右目にぴったり合う円筒を作る。左目を左手で覆い、筒を右手に持って右目に当てる。相手は筒の反対側から目を当てる。相手の目を見た時、自分の側に何が見えるだろう? クリアな空虚が見えるだろうか? (詳しくはヤンさんの著書『ホームには誰もいない』をご参照ください)

——これを理解するには、何かしらの目覚めの体験が必要です。

ヤン 特に必要ではありません。探究は、そもそも段階がありません。探究は、あなたの選択で終わるわけでも、すべてをわかったと思ったから終わるわけでもありません。それは、いわば恩寵です。

目覚めの体験は『存在』そのものではありません。個人は、超越体験のほんのわずかしが味わうことはできません。非二元は、個人が理解できるものではないにもかかわらず、特定の個人が目覚めの体験をし、非二元を直接体験したかのように見えます。

す。無限はすでにそこにあり、マイノンドの雲が取り払われるにつれて、無限という青空が見えるようになりま。しかし、それを見るのは探究者ではないのです。あるのは、青い空だけです。探究者という妨げがなくなっただけです。それは、あたかも温かい水が通り過ぎたことにより、周りの水の中に溶け込む氷のようなものです。

ヤンさんの
セミナー・個人セッション開催!

- ◆イブニングセミナー&サイン会
6月12日(金)
 - ◆ワークショップ
6月13日(土):自己探究の神話
14日(日):存在(ビーイングネス)の鏡
 - ◆個人セッション
6月12日(金)、15日(月)、16日(火)
- 詳細はナチュラルスピリットHPをご覧ください。
<http://www.naturalspirit.co.jp/workshop/Jankersschot/jankersschot2015.html>



『ホームには誰もいない』
ヤン・ケルスショット 著
村上りえこ 訳
1,800円+税
ナチュラルスピリット